『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』12（2010）：11－13

「ユーラシア（徳永）文庫」開設に際して
――父の思い出と残したもの――

徳永隆

このたびはこちらの千葉大学図書館に文庫という形で、父の集めておりましたユーラシア関係・シベリア関係の書籍を公開・利用できるように整備して頂き、誠に有難うございました。金子先生はじめ千葉大学文学部の研究室のみなさん、そして千葉大学図書館のみなさんの大変なご尽力に深く感謝申し上げます。特に金子先生には３年前の 2006 年秋より２年近く、わざわざ千葉・成東のご自宅から新宿・百人町の私の実家まで週に２日も通って頂いて、膨大な量の書籍と書類などを分類・整理して頂きました。その間、2006 年末には母が急逝したりしまして、金子先生にはいろいろとご心配・ご迷惑をお掛けいたしました。さらに、整理の目処のついた時点で金子先生が入院され、大変心配いたしました。この整理作業は相当な重労働であったことは間違いのないことで大変申し訳なく、ここに改めまして御礼とお詫びを申し上げます。

父が亡くなって６年を迎えましたが、私も生前から千葉大学の図書館に蔵書の一部を寄贈し始めているという話は聞いておりました。父も家のなかにあふれかえっている本をどうにかしなければならないとは考えていたようで、分野ごとに大学の図書館なり、研究室なりに寄贈しようとしていたようです。その一環としてユーラシア関係・シベリア関係の書籍は金子先生のおられる千葉大学と決めたのだと思います。ただ、その後本人にはその意志があっても体が思うようにならない状態となってしまい、途中で整理自体が頓挫して膨大な書籍の山が残されてしまったわけです。父の死後、すぐに早稲田大学図書館の方々が見にこられましたが、あまりの量の多さに驚いて手を出しかねて帰ってしまうといった経過のあと、様々な事情によって金子先生に全面的に整理をお願いすることとなりました。そしてさらに皆さんのご努力により、本日このように文庫のお披露目という日を迎えることが出来ました。本来でしたら父がご挨拶申し上げるべきところではございますが、それもかなわない今このような形で完成した姿を拝見しますと、なによりも父にも見てもらいたかったと痛切に感じました。本当に有難うございました。

ここで、皆さんに少し伺いたいことがあります。それは大学の教員という職業についてどのように感じているかについてです。このなかに親や親戚が大学なり高校で教員をなさっているという方はいらっしゃると思います。したがって、これは私に限った話なのかもしれませんが、子どもの時には、父が起きてくる時間は昼ごろと遅いし、さらに、大学に出ていく時間も毎日ばらばらでしたから、決まった時間に出勤していく他の家庭とは少し違うなと感じていました。しかも、火曜日を授業のない日と決めた上、お客さんの日と称して一日中家にいて、その日は朝から晩まで多くの知人や教え子が

次々と訪れてきていました。せまい家でしたので、父の部屋に家の中を通らずに入れるよう窓から出入りすることもありました。当時はこういうことが当たり前になっていましたので、今にして思うと、私の家は変わった家庭環境だったのだろうと思います。

さて、前置きはこのぐらいにしまして、金子先生より父に関して何か話をしてほしいといわれておりましたので、少し考えさせて頂きました。これまで父の愛書家として面はもちろんのこと、文学や映画・演劇、音楽などの話につきましては、父自身もそちこちに書き散らしておりますし、皆さんもいろいろな形で触れておられますが、一つだけそれほど触れられていない趣味の分野があるように感じましたので、その点について少し述べたいと思います。

父の趣味のうちであまり知られていなかった分野とは鉄道に関するもので、父自身は『ブダペスト日記』のなかに収録されているように雑誌「東京人」に外濠線のことなどを書いていたようですが、その他にはあまり見かけることはなかったように思います。いわゆる市電、路面電車に関するものに限られていますし、車両の形式など細部にこだわるとか、乗り方にこったりすることはなかったようですので、最近話題となっているいわゆる「鉄チャン」ではなかったと思います。金子先生が整理を進めておられる際にも、JR はじめ鉄道各社の種々のパンフレット類が大量に含まれていたことに驚かれたことと思います。これも映画・演劇のパンフ・ちらし類、音楽会のパンフなどとは一応分けてはあったようですが、資料の山のあちこちに紛れ込んでいて整理の妨げになったのではないかと思います。なにしろ１種類のパンフを必ず４，５枚ずつ持ち帰っていましたから、それだけでも相当量になっていました。どういう種類のものであっても、必ず複数枚収集し保存しておかなければ気が済まないという癖がこうしたところにも十分でているのだと思います。

こうして金子先生に整理して頂いたもののなかには、主体であった書籍やパンフ類のほかに紙袋に入った元原稿やメモ類も大量にあり、私にとってはひとつ気になるものが出てきました。ごく小さなものでしたが、そこには都電（市電）の路線の一部について開通年代がいくつか記してあり、私の書いたメモも一緒に出てきました。大塚仲町（のちの大塚三丁目）・護国寺前間、大塚仲町・伝通院間、江戸川橋・矢来下間など、都電の系統でいえば、大塚駅前から錦糸町駅前までの 16 系統（父はこの系統で小学校・中学校に通学していた）、池袋駅前から数寄屋橋までの 17 系統、江戸川橋から須田町までの 20 系統に当たる部分のもので、確かにこの件では調べておいてくれといわれたことをうっすらと覚えていました。といいますのは、私が都電ファンで路面電車の同好会に加わっていることを知っていたからでしょうか。ただ、これをどういう形で利用したのかはわかりませんが、以前このすぐ近くの茗荷谷には東京教育大学がありましたし、昔風にいえば高等師範付属小学校・中学校もありましたから、ここに通っていたころのことか、あるいは東京教育大学に講師として通っていたころのことを書いたのかもしれません。ただ、開通年代を問題にしているとするならば、やはり子どものころのことを書いたのでしょう。このうち私も現実に見たことのない矢来下と江戸川橋間は短い区間であ

るし、1928（昭和３）年 12 月から 1944（昭和 19）年５月までのわずか 15 年半しか営業運転していなかったので、そのことが気になっていたのかもしれません。いずれにしても、こうした細かいことにもいちいち当たっておかなければ気が済まないという性格の一面が出ているということだと思います。

このような父の趣味の一端を受け継いで、私もいろいろと収集しています。なかでも音楽に関してはクラシックではありませんが、レコード・CD は合わせると 5000 枚ほどになります。ただ、父の収集していたレコードはどの位であったのか、間に戦争を挟んでおり戦災で家が焼け、ほとんど焼失してしまったようですので、よくわかりません。ただこうしたなかでも、特に鉄道に関心を向けさせた意味では無言の勧めがあったように思います。先ほどの鉄道会社のパンフ類の収集や写真撮影（後述する街並の中の電車など）を永年続けているのを見ていた影響か、いつの間にか鉄道、なかでも路面電車に関心を抱くようになり、全国を飛び歩くようになりました。ちょうど全国で路面電車の廃止が相次いでいた時期にぶつかったこともありますけれど、ベースには父の姿があったかもしれません。

遺品整理をしておりましたところ、写真類も相当数出てきました。日本各地はもちろん、ヨーロッパに出かけた折のものも多数あり、まめにあちこち出かけていたことがよくわかります。学会でどこかの街に出かけた折に、またいつも家に来ていた方々と史跡などを訪ねた時に、街並や寺社などの風景を写したものが多いのですが、そうしたなかに必ず路面電車・汽車・駅などを撮ったものが含まれています。このあたりにも昔から鉄道への関心が強かったのかなと感じさせます。これらの写真やアルバムにも後年のものには撮影年月日や撮影地がメモってありませんので、いつ頃の、またどこの街かがよくわからないもの多くなっています。さらに、他にも記念乗車券やら都電の本なども散見されますので、そこまで手を出していたことがわかりました。ただ、父はこうした鉄道関係の同好会のような組織には加わることはしていなかったことは確かで、これは群れることの嫌いだった父らしい一面だと思います。この性格は私も少なからず受け継いでいますが、唯一の違いは私が同好会に加わっていることでしょうか。

なお、残されたなかでもう一つ量のかなり多かったものに映画関係のパンフレット類や冊子がありました。これについては、生前から映画に関していろいろと意見を交わしていた方が関西外国語大学の図書館におられることがわかりましたので、その方に数回に分けて段ボールなどで寄贈しました。こうしてこれらの収集品もゴミにならずに好きな方の手に渡り、活かされる道が開けました。

以上、とりとめもないことを話しましたが、まだまだ遺品整理が遅々として進んでおりませんので、これからも整理しているなかで父の新しい面の発見があるのではないかと、期待しています。

本日はわざわざこのような席にお招き頂き、誠に有難うございました。

（とくなが　たかし）